報仇

絃武言尾分仇

四

へ 13
3018
4

門へ 13
3018
巻 4

高尾外傳

繪本報仇高尾外傳卷之四

江戸

楚満人著

昭和九年七月十二日 購求

第九回

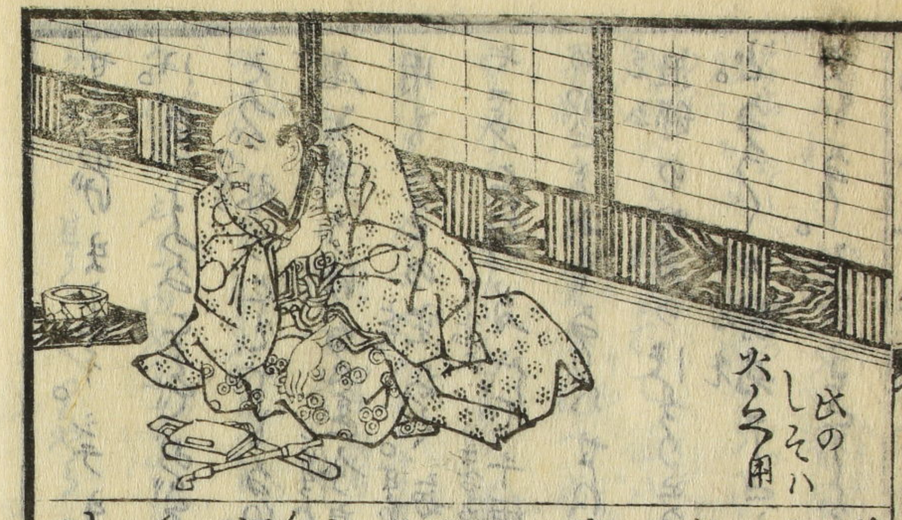
高尾ハ揮藏にもひ其ハ志ハ重く膽ハ氣ど。都く頭城くいるものハ虛をあれのみあわさ實情ふくく。賢きも愚ふうもこと。ふまくはぬ。ぬ。ぬ。地獄へいらぬ人とて実の通り者まいべきなるべバ人すくるも妾の夏を思ひきり。孝行ふとうりのハあとこ氣まる。ハ必の異見をいひまくく金子五両を取りいでくこと。ハ餘りくと。しうまど。いれのこあふあくへあげまハ。ぐどにあまふ

く母氏の好きものとも求めて、あけ暮れ、
年季のあるまで、身をこめて、ばくちずくにかまへて、
婦ふり、母さまへ孝行をいたしまゐらせ、しハ実の
母さまといへ、幼少時に死られ、そをより継母さまと
そだてられしが、その母さまと人をにくみ、ひがみしくな
りゆひしゝ。便りにハ伯父さま一個なれど、
これも今ハ遠国へ赴きゆひ、使りずくるひ身の上、何平
こをいくらゝ真実の兄弟と思へく、偽りになるく下されま
せトちゆりがちゆる物語ハ、揖藏ハ深く高尾が情を
うんゞ厚く礼をのべく立還り、這後ハ絶へく廓へ

ひゝがゞ只家業をたゆげ、母へ孝行がとうゆく尽しぬ
爰ゝ其　とろ千束村ゝ。お束長者とうゆ、千束屋
富右エ門といへ豪富ありしが、この富右エ門不図高尾ゝ
ゆをこをあ、金あるして高尾が身をあがゆひ、今戸の片
辺りへ別荘をいとゆ、爰ゝ高尾をおき、日毎に通ひ、酒
池肉林の奢いものゝハ八百善、料ハ木母寺と、樂を
極ゆをゝ、ぞも高尾ハこをゝ、ゆをこをよろこびぞ、只歎くと
ゝらしゝゆる。ゝろゝふ、此家右エ門が本妻へ、お福とゝびて、志
頑なる性質なりしゝゆば、支が高尾をうけやゝて、用ひお
くゝを聞く、寧ゝいろ。何卒しく高尾をそゝげけゝや

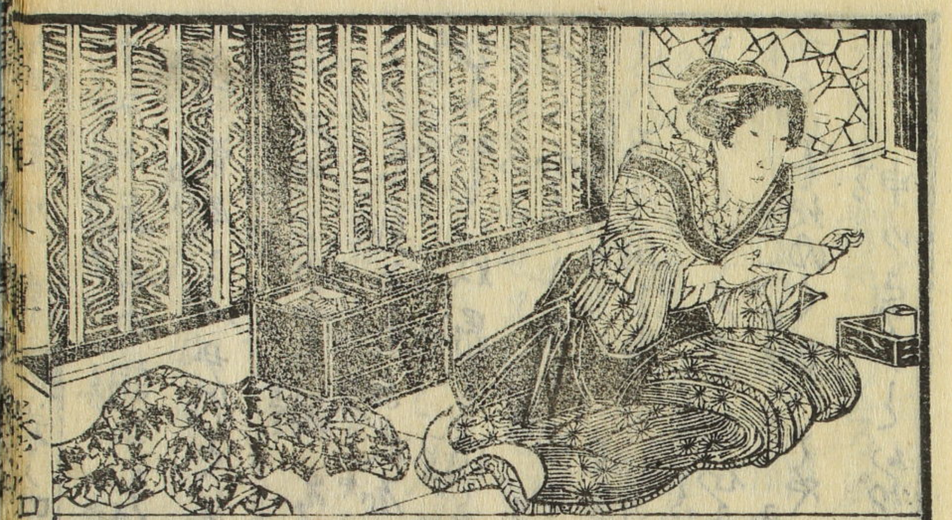
とゝろく家ふ入の番頭徳八といふものを迫づけ一二
徳八ハ日頃うゝ。こゝろ付く者をよの覚へくいるで
ゐるのトゝ呼れて徳八「とゝ言いまして改まつて私ハ
お明うら爰ゝ内へ召奉公ふまつりまづ〳〵番頭職と
もなりまして日ゝ夫婦ゐぐらゐ夫婦ゐぐらゐを
つけくらぐさりまするもの。依ふ呼つくよのものぐらぐり
生まるうゝ譬へ今命をとらつしやりまして。何
の否とやまをおやうト。又バハ福ハ面をおげまして「その忠義
みんをもつゆゐふ。こゝろ一大支のことをそなとふ言付る
がゐふく徳「イヤモウ爰の支でもまゐ

せくあげましやう。シテもつの「大支の口用とゐつ者る
ハ。ぶのよゐるとそおざりまして「そんゐらいつく支
そゐが。刃のとこでもゐのひかどハ且那ふハ三浦屋のう
尾を考うけゐる是今ハの別荘へ岡ゐくゐた。ハ屋浦の口
用もうこの空ゐく毎日毎夜の奢つゐあり者ゐう。そこを
そこもこちの分代で千両や二ゐあるとゐいつても。何所
のいこゝおもうゐハせねど支一ハ世間体も悪ゝ。
且那の身のほうとゐる高尾を呼ごゐゐこゐ
ど。ゐゐ〳〵口悪見やとそ。歳いまゐる者ゐみ口。素質
でもゐ。そこでこゝ支ゐやふゐ〳〵ごのゐく



氏のしそハ次ゝ用

寥ふ入をゝあんで取りよをゝ拔
橋の縁切　擾こをゝをゝ七ゝ
行ゝ寥ふ高尾ゝのをゝ
耶ゝハ又旦ゝが内ゝ出源でもあゝる
ゝゝ　ゝゝ　桃子へゝゝとへゝゝ
げゝたゝゝゝゝ高尾ゝの話
ゝゝ寥ふ。ゝふすゝ自然ゝ二
個の縁ゝ切ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝぬよゝゝ頼んゝゝゝゝゝ徳
ハゝ点ゝ



する。今日ゝ日ゝゝゝゝゝゝゝ

すると。文金の詞ふも福いよろこひ「そんなら
こそ首尾よかりくくとこそ〳〵ご病氣
猫私のまつまも國元なれど全くそんしさこけでい
ろけなどと知ふ角ふ朱屋の家が大変且那ぶ大切とやらら
こそおもいは最も仮らこいのあ。ぶ燒ちとむ〳〵
ふくくくんみと己がむの邪をうち何の猫自そこ家う
しふ双ふ血を磨ぐむの肉ぞかそろ〳〵なを徳八はい福
ぶこのくこにろく忽ふ一個の要斗をめぐら〳〵今戸村
てといそぶゆく。日はそや雨ふ仮さて人の新之個長く見
ちく中のさぶりとぶぶ〳〵訪くて程ろ今戸村の別荘

へいろう。茶門ちろくろ厨あぶりながら徳「ハイ徳八てござり
まんとひつて中の間の障ふをめくまば。高尾いろも
ひ地すぐまぶ横ふ引く本をよみつ居ろりしぶ。そ
まと見ろうろ。ちれあきろをを徳「イヱくそふあろてお出
ろさまもせ又ぞそろるふござりまんち「ハイごと
といろくこてぞこいふ病氣でもろまども。ぞふも氣ぶ
ふこのぐるらぬ徳「イヱモウ定やく〳〵ろうでござりまやう。
その旦病根い私がよくぞんじてちります。そわまく〳〵
と思〳〵ろこぶ。ひても旦酒でもめ〳〵めぶりく。茶をかくこら
〳〵ろこまもまちぶろ〳〵うござりまして且那も今明日

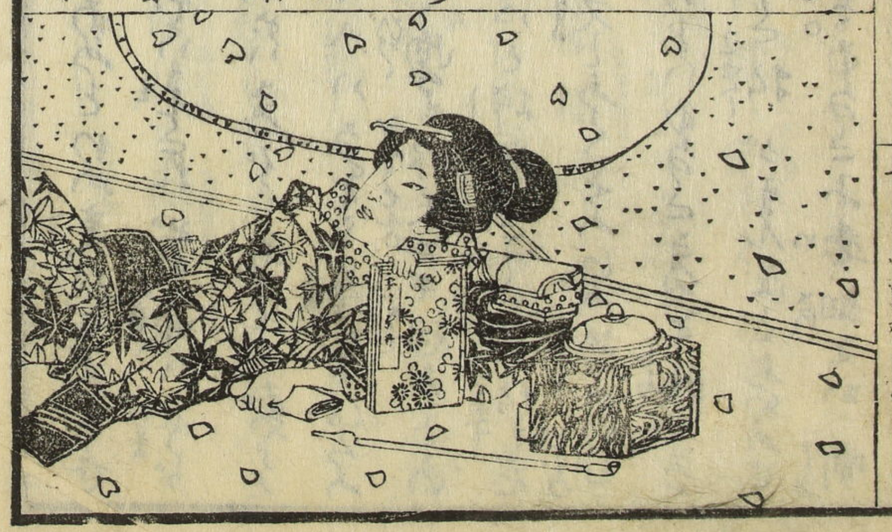
いれ屋敷の門用ゝ門開〳〵ござりますわよろく〳〵とら〳〵へもか出いござりますまい私も今日ハ今朝ハ方くあるにまつてゝ弟所まつ〳〵さうら。何ぞハ百善へちりにやつく〳〵一盃こべましやうト。下男に分付くハ百善へちりにやをとりよせ所狭きまで座敷へなら〳〵べ徳「サア〳〵一ツやあがりませトあぶら敬をちくすくひるに。高尾も盃を取思ひず数盃とうとひけつくを「なんふ今日ハそなたこのお浅ぐよい氣保養をまし〳〵ト兵べ顔をおろがめ。徳ハ〳〵ござ〳〵徳「鳴呼あるこい何あもにごんござりませぬうとらへべいとぐ。四不使ぐ。とこ〳〵ハぜのも泪が

とゞまりまたト。左右の眼をちばゞけば。高尾ハ不審ち是ゆ〳〵ぶ〳〵ちこ〳〵が何ぶもちゝぬあ〳〵ぬ。不使なとハたつやぜ〳〵いのこけでト。ちひうくまべ徳ハ〳〵泪をのごひ。徳「サア私が悪ぶ便なとやここけをいの時ハ。ハ主人の悪ぶを訴人するぞぜん又いまぬ〳〵ハあるこのあ身の上あちゞこと。いのもう〳〵いまぬ〳〵〳〵武蔵鐙〳〵ちあり〳〵ハ人ハ知ぬと昔の人の古哥とやらん。ふ〳〵よんぶこやすが。ちちやごまこくしが今の身に引くゞぐ。ぎあつみうこでちちを思べばち〳〵ぬ昔もさぞうこ上なりひやちを見て泪がぞのもト者ゝ今わぜちうすると泣ちゝ尾ハいく〳〵ちこ徳ハどの訳も

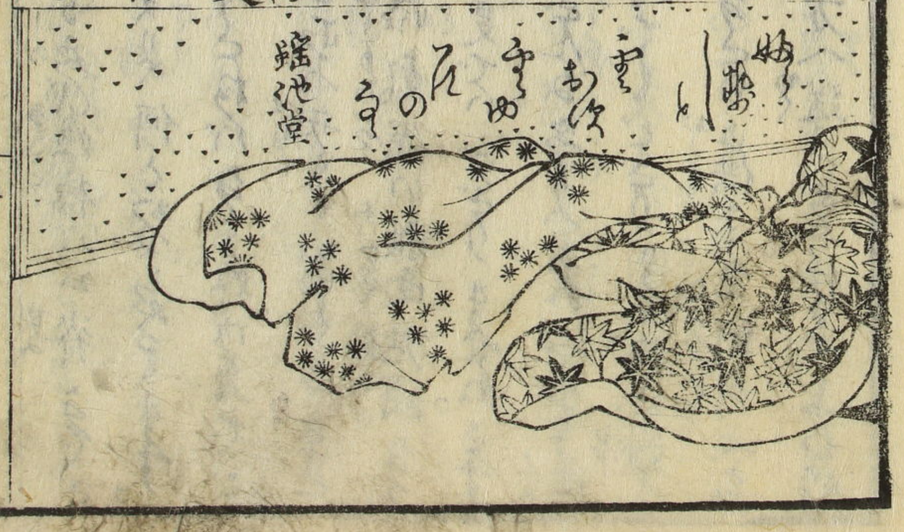
いまはかこつけ身の上ものがたり夏とさいてハひとぐ
訳をなるして聞せてト。いくば徳ハ聞くと「サア」その
まけといハ全体とちの内の内室かくさ夏といハけ
しうるぬ情熱深い産を付そを象姫婦女ありるまで。
あぶろ度のしけこのハ三日もこぬうちにとたどるくハ幾
度ろ。ヤどの出れのちかきの多名ハ名ハかのあるを身受
あく変へかきの手夏を殊のうひくくハ思ハく。アノ
かとろ〜ハの器〜てとをろと「此妻茶をこさくはさを」まで
〜とと。最前ハ福ごこと〜ろる。縁切接の細末を見るハ
ふろ紀とをを。ちぬ尾ハ嘲ろ〜「九ハ世の中

ハ本妻の妬をとねこで。難義さあるとハの夏ハと。
多くの多紙物語や狂言綺語でハとを九ぞも。則ハ今ぐ
たこわくとを夏ハどおとろしの方ハ方ハ方ぬ手ぬう
いことく。身をふるまて恐るをバ。徳ハハ多をも多をひとの
〜て徳「サア」こと〜も頼ま〜ぬ作天テモ恐ろ〜の
工のあ武。こと〜ハとのある夏ハと辞退ハて〜ろ〜ハもと
の傾ハ〜てハかぬ〜やうまの〜又どぬぐをハの新のかぬ
ろを見バ。とをうをたのこいハ〜ハいらどハあのとさるを教ろう
〜やろと思ハの多ろうと〜まり私ぐまんまと考のを
くあげまを多うと清合て来こと。ひとあるこハ委細をハ噺

しゃ。さるうのも甘くこと。そを思
反ぶろくの代毒茉をうけとろく。
ますの乗り生くこ山の内四推量ゑそを
ます世ト。寔しやうあ物語るば。高尾ハ
いくぐ泪ゐ金　そを一九る世の中ゑ。
ゑこ一ゆど関係ゑのめぐまくこと。
めろ。寿の母ゐハ幼ゆで死ゆ。継く去
い母のゑに育ち。待ふまくこと言号
の夫といも何と母く。怪しのいゆ
代身ゆまろ世ば。そを。ろゑぐ



苦労くて。ゐを。もかくくのね。烟花の
性とゐ思ふぬ人ゐ世花とゐらまて
栄耀栄花の今の身も。何のゑ心
がいさもゐど。一日くゑらすうちゑ
幸妻のねこそいく。代身をころ
すと恐ろしいユこハゐえる周
果ろ業ろ。そてもゐぐくゑ人ゑてゐ
の命ハさらくゑ惜しくうねと父
さゐや嘆くゑの歌ハいぐゐろ
ろ其安否ゑそひきゐば。死ぬるぐ



門そうるしのト金沢をたづくる再び泛徳八ハ脊をそでさ
ナリ　徳八お道理ぐどざりませず。スリや何とかうあるまます。
あるまさるハ父母や母の仇をうとねばうるれ此身でご
ざりまたとなそのいの夏るうとんるの所あ弁くとものくるさと
まりてようや四安侍る所ガ。ヲノ恪氣深い離面老圃ある
くるまるを片時もえる夏でハ　どざりませぬさす
まバ敵討どころ一生涯埋れ木。ぜんるあらんあるいぞまも益
かの夏とふ私が思案としいハ外でもどざりませぬう逃ぐ
お奥のまと母ゝ今霄ひそろにあるまこの立供しく何所へる
ゝとも逃のびてあるまこの面縁の方へ送りもぐけるぐ上ゐ刎

ゐるるずとんる所ぐ。そいる長理を思ゐくいるとゐゐくぐの
ゐるる難義ゐあるまいるのでるおどざりませぬ。ゐゐくまるへ
ゐをさどめくお仕度をトいそぐしゐるバ高尾も有繋
女ゐの涙ゐふ。実ふあるとまと点ゐく。ゐる弟長ぐみ
しふる。

第十四

徳八何ゐる高尾を偽て共侶ゐまゐらんとするとい
ゐ従来徳八高尾に飽まで恋慕こんでいるゐしゐゐ主
人の妾とゐひ殊文いひ出ゐて口説ゐるまゐく兼
引ぐまゐまるゐ。ゐるバ。ゐぐハせんと勃暮脅をくるゐ

ちゃう。執妻が福縁切摂をあてゝ人目よく頼ーふようとて。忽
地一討をのゝけ。こゝとを毒薬なりといひて。まんまと高
尾を引ずりかびきいでー石濱の川辺まで来りしゃう。あ
ろーも廿日の月護の木の間をいづるに。高尾ハこゝまで
喘くゝーつと来るバいとゞ身うちもたゝまゝて。「モシ」く
徳ハどの。ぞうも息ゞ切るてモウ一足もあるうまとぬちゝと爰
ぐ歩んで往く下さりまゝト濱辺の松の小蔭ふようまゞ徳
「あるんどつのふ歩る夜中歩行くと夏もあいお身の上さ
ぞおまゝ所ゝさまゝーとでおざりまゝやう。モウそちこち
ひつるぐござりまゝまゝバ。よりや追ふもてまで来ること

でござりまゝまいちゝとの間ゆえんでまゝりまゝやうト
松ゞ根ふあゝちゝけ。暫時労ゝを安むるうち。高尾ハ
白昼ゝり千般のゝ労ふ。さゝとむとあゝ。アイタヽヽと胴先
へさゝとむとあゝに徳八駿を 徳「コリヤ」ゝ倒のゝ痛ぐ
おざりまゝんゝトうゝくまゝり懐へ手をさゝいまゝく痛
をかゝつゝ歩ゝまゝバ胸りゝ 「コリヤ何者ぞ」と
ふりかゝるせバ 徳「モシ」高尾者ゝいの関係ゝまゝ人ゝ。ゝ
とあゝゝを見ゝとゝ死ゝより胸ゝとゝとゝくゝ。首のまゝ
つゞんゝら。足の爪先まで。悩まゝてゝくゝれぬいゝまゝゝ。
もゝゝばぬとゝくあゝら。ちゝやく居ゝとゝゝゝゝ。仏佛さゝの

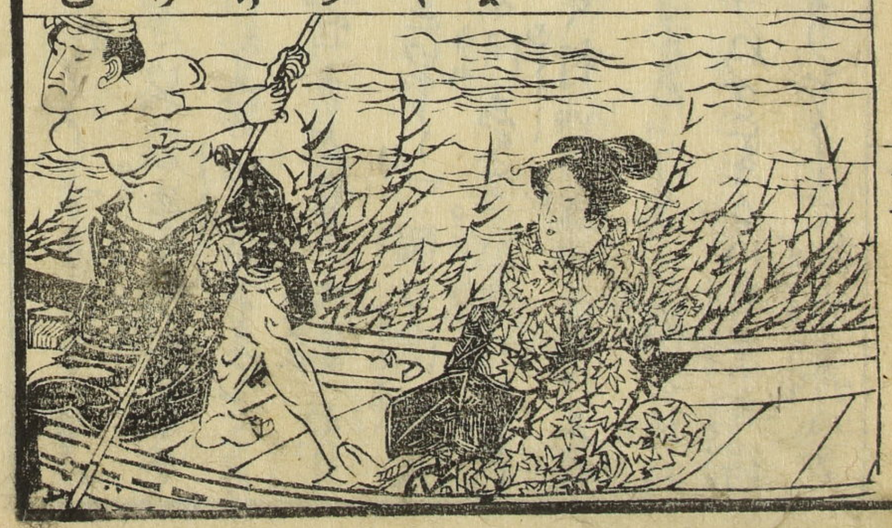
引合せぐ。こゝいゝ冥義ゝゝ。両個あとうに
人の為に所ゐいゝとゝいゝ。深い縁でござりまし
う。今日の志ざを思へば。まづあなたの為ハ此徳ハ命
の親でゝござりませぬ。すまぬその儀ゝ礼をば〳〵く
ごさりまして。よゝどざりまし。ゝゝ。
高尾いかゞろ。さそゝ此男も為実らしく見せとるも。
此身に礼あると故と。さぐあくさと思ど今更に詮方
なのても笑ゝても人里なるまし〳〵石濱汐系岸寺派のかと
外寂莫　さて高尾ハ此場をいろ〳〵。
のが思んのと詞を和げ　「なるかとそなたのゝ。

命の新のことなるまバ。どのようなことをいと思ども。
ゝゝ笑ゝない夏。まして何もそのようなせるひ夏でも
ツイアイといゝ思ひたるなまど。今てゝゝゝてハどゝゝ
亜ゝゝこと。どのゞ堅日まで堪忍してござりませ。
どゝゝゝと落付次第。どゝなりとかまゝ夏のかんゝなと
ゞのまゝやうト。泪ゞゞバ徳ハハ「イヤ」とゝいゝとて奉理
にかゝゝゝみせまりて。ゝゝゝ夏をゝでなるゝいやらいや
ゝゝとゝゝと所が。今ゝゝかゝ前を送りくゝして。そゝゝ
〳〵とそなゝまても一向つまゝぬまけ。ナントまゝゝもと
るい船ゝ素金ゝと思ばとゝハすひ左理。

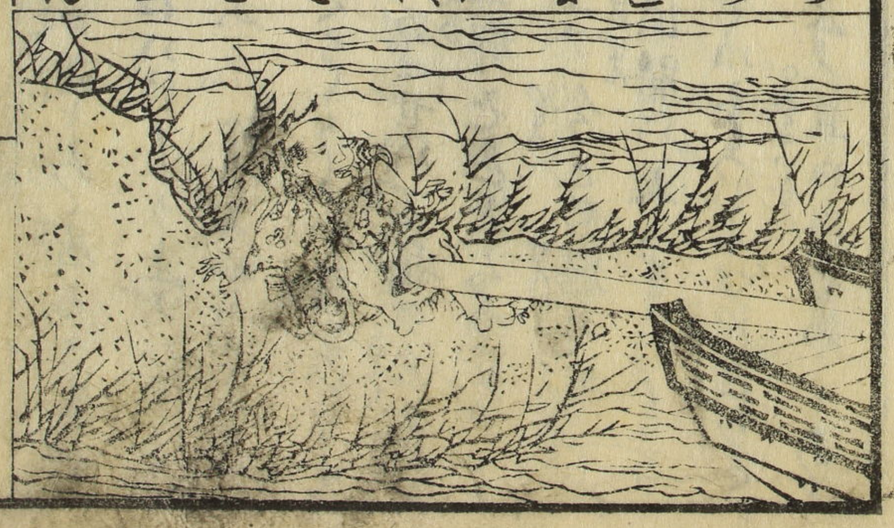
るゝご紋様の通り。まゝ人の四親類より。えんりょとゝびれて。
もうそを。まぢば。當坐の四方びに。今いちど。ぞめぞ。爰ぞたのむ
礼とト。又あるぞるを。ちらく突のけ。「ヨ」おまえ人ハ最前い
ま。あやんちとあ実とハ。さうぞり遠ゝと。今う詞。ソリやそふい
不実なお方ゑら。そこあや。いろしたにらしゝそ。何のこの
しゝもるの。早の氏川ゑに。ぞうゝて。紅くうゝハゝと名を
ぞひうぐ。せめくの切と。渚をさゝとゝゝ。業ふお遠
の番所徳ハ。ゝしくまゝてとぞめぞら。跡をもゝふく。走
ゝ行ふ。濱辺の芦の。ちげゝよう。わゝハ。ゝいぞゝ。一箇の
偏舟。ひつめらゝ。高尾を。奪ゝ。漕出さんとする。侍ふ。

徳ハめゝて。ふとめゝて。船をぞ。めんゝゝ。すぐゝ。どこうと
ハ見ひとも。せず。川中。えるふ。ぞさいぞね。徳ハ河辺ふゝて
ずゝて。徳ハ。その船ふのうる。女ハ。ゝ。女房。そゝ。そのの
まく連ゝハ。ハ。引も。同前ゑり。ふゝ。せうどせト。大変。あげ。
どるゝゝば。ゝのちうも。ふゝ。ゝいぞゝ。一個の。漢徳ハ
ぐ方を。ゝと。白眼「ゝとの。崑坊。何。ゝる。ゝ女ハ。ゝする。ハ
ちゝゝぐ。女房。そゝ。ゆふこそ。連ゝ。行。四の五の。いゝぞう
ちふも。せん。ぞすると。ハいふ。ゝらもあゝど。まぢハ。成ゝけハ
ふ捨て。ふくも。ちうちの。慈悲。方。役。うゝぐゝまるハ。自業自得
ゑるうゝとそこで。体員。せのト。ゑ。まうちゝゝて。詐言。舟ハ。そ

しゅうくこださりぬ。そもそハ　さてあるき
千束屋あハあるじの妻あるく。番
頭徳八をしたがへ　高尾へハ縁切
状をのまゝ　うくハ仏壇すゝ。
このうくハあるじあるもこの茅をのま
せんと次の給膳部の汁ハいまとく
いるところへ茅うくる丁稚三太「モシ
おくさん何をなさるまいと。
けらまく悔りゝ「ヲ誰ろ
とおもつゝそこで三太ゞが今こ



のうくハいまこハヲまく。ぬしぶ
あるり酒がすたるの茅。その酒の
ぬひあるるある茅。そもをいま
このじや　三太「へそうでござり
たくハ。まこゝハ又りや毒茅なん
ぞうと　「そやこうゐ何の毒
茅なんぞとさもが且那ハあげて
よいものうる。もうくまこちぐと
まをひ汁のうくハいまと支を
今ゝ且那ぶ湯ゝうくりうさん



してもろ〳〵ずく〳〵ぬんるなやト。口尚〳〵居るうちに
家右エつハ湯〳〵りろり富「ヨそ今紅ハけ〳〵ろ〳〵ずひもぶ
くるろと。サろ〳〵ぬやふ飯をろまト。いろ〳〵おふくハ「ア
んふそうでどざりまやうとぶくくろ〳〵ふ膳をいろ〳〵て
〳〵て待りく〳〵ありまり〳〵ト。膳をいどせバ丁稚の三太小
蔭〳〵りうぐびろそ三太「アモシ〳〵且那そをろくてハろる
い〳〵ト目まぜをすまバ富「ハテナア今この膳の箸とと
ろ〳〵とすまバよせといの。イヤ〳〵此膳ハろまの〳〵。マア
〳〵ようそあ〳〵ト つれやまバおふくハろろとすそ〳〵ちく
おろく「おまへさんるんでどざりまり。且此膳をめ〳〵あぐ

ろぬといの おろどざりまり。サろ〳〵せめく一ト
まりと。おあぐりるさまとまと。すくひるかど尚うと
ぐの富「そまかどろせるてすまぬ飯なろ。そうと
まぐ先へろく。そまろ〳〵おまふろまろ おろく「サろそま
ハ富「そんるらいろふ何ぞよふすぐあるろ。サろ〳〵ト
てぐ多端の詞お福ハ何とい〳〵ま言訳るくぞ見くおけ。